

スペインでの学び研究報告

植田 実¹⁾

A study about Spain Tennis

Minoru Ueda

Key words : 育成システム, テニススタイル, コートサーフェス, マッチ数, 環境

1. はじめに

かつて「ピレネーの南はアフリカ」とヨーロッパ諸国から言われた国スペイン。テニスにおいても、1970年代初めまでの芝コート全盛期には世界的な選手は数名しかいなかった。2003年のATP世界ランキングによれば、スペインは世界トップ100位以内に17名の選手を擁する。世界のテニス界は1970年代～80年代まではアメリカ選手中心の戦いであり、世界ランキング100位以内に40人を超える選手層を誇っていた。しかし、1990年代に入りヨーロッパ諸国の台頭、特に1992年バルセロナオリンピックを機にスペインテニスが頭角を現してきた。現在ではデビスカップ（男子国別対抗戦）の優勝国となるなど、世界一のテニス強豪国となった。私が滞在した2002年12月から2005年1月まで2年2カ月間のスペインでの学びをまとめる。

2. 研究の目的

スペインテニスの強さは何なのか？ 日本との違いは何なのかを練習方法、大会、環境の面から探り、今後の日本テニス界発展につながるものとする。

3. 方法

練習方法、テニススタイル、コートサーフェス、大会数、マッチ数、スペインテニスの背景に

ついて調査し考察していく。練習方法とテニススタイルは著者が所属するAcademia Sanchez Casalでの体験と大会視察によるもの考察する。特に男子テニスについて。

4. 結果と考察

スペインテニスの特徴

プロフェッショナルになるための準備をすること。パートタイム的な練習場所としての位置づけでなく、長期滞在での強化、そしてジュニアからの一貫指導体制を軸とする。指導方針は三つ・練習システムの確立（正しい練習を毎日正確に行う）・大会システムの確立（テニスの質を上げるため、何度も試合に出場する）・体力トレーニングの日常化（フィジカル的な強さからテニスの質向上を目指す）プロになるための、世界中の選手達が行っている、「練習の繰り返し」という単純であるが一番重要な基礎を作り上げることを目指す。

① 練習時間と方法

一日6時間（土3時間 日休み）の練習を一年間通じて行う。練習内容はドリル練習、ラリーによるコントロール練習、マッチ練習の三つに分かれる。試合期間中でも遠征先で行う。特にジュニアや若手においては、どんなに長い試合をしても、試合後にドリル練習を行い。大会に向けての調整練習はせず、試合と練習を常に行う習慣をつけさせている。年間通じ大会に出場できる身体づくり、くじけないメンタルのタフさを養成している。

1) 競技スポーツ学科

② テニススタイル

スペインテニス最大の成功は隣国フランスで開催される“フレンチオープン優勝”である。そのサーフェスであるレッドクレイ（赤土）コートで最も必要とされる粘り強く、強烈なグランドストロークが主体となる。ベースライン後方から強烈なスピンのかかったストローで勝負する。このプレースタイルはウインブルドンの芝生コートでもUSオープンのハードコートでも変わらない。スペイン人の徹底する強さを感じるものである。

③ コートサーフェス

バルセロナにある167か所のテニスクラブはすべてレッドクレイを持つ。世界プロツアー（男子ATPツアー、女子WTAツアー）の大会サーフェスの割合は、クレイコート47.5% ハードコート42.9% インドアコート6.2% 天然芝コート1.7% 砂入り人工芝コート1.7%（ATPにおいては0.6%）である（2003年調査）。特にヨーロッパでの大会はイギリスを除き、クレイコートを使用する。日本では砂入り人工芝コートが普及し、世界の90%以上を占めるハードコートとクレイコートがなくなりつつある。サーフェスはプレースタイルに大きく関わり、テクニックにも影響を及ぼす。ハードコート、クレイコートは世界基準のコートサーフェスといえる。特にスペインの国内クレイコートでの成功が、世界へ繋がるものであると固く信じる。

④ 年間大会開催数

スペインは年間43週間におよぶ国際大会スケジュールがあり、特に若手が腕を試すことができる大会（フューチャー大会）が35週間ある。スペイン35、アメリカ32、イタリア29、…日本7となり、世界一の若手育成大会システムが確立されている国といえる

⑤ マッチ数

年間にどのくらいのマッチ数を経験したかを調べたものが次の表である。

	15才	16才	17才	18才
スペインA	3	48	61	
フランスA	6	30	55	
フランスB		5	30	37
日本A			4	8
日本B		26	36	58

表1 ジュニア期におけるシニア大会でのマッチ数

ジュニアより高いレベルでプレーするマッチ数が年間55～60マッチ経験する必要があるということが分かる。マッチを行うということは、ゲームプランと勝負勘、失敗を恐れないチャレンジ精神、闘争本能を引き出し磨き上げることにつながる。勝負の駆け引きを経験する上において最も重要である。練習してきたテクニック、戦術、身体のパフォーマンスを確かめることができ、次への明確な課題を知ることができる。

5. まとめ

スペインテニス協会の今日の成功は、世界一の大会育成システムを作ったことにある。若手選手が国内で腕を試し、他国の選手たちと凌ぎを削りあえる。海外に行かなくても他国から選手が来てくれることは、経費節約にもなり、スペイン語で転戦できる有利さもある。スペインは温暖な地中海性気候、そして緩やかな時間の流れを十分に活用し、独自のテニス環境を作り上げたといえる。ヨーロッパ諸国のコーチ、研究者がリサーチしたデータや新しい練習方法はスペイン人にとって興味深いものではなかったのだろう。クレイコートでの伝統を守り続け、新しい未来を築いているともいえる。今後日本は、これまで歩んできた日本テニスの歴史、伝統を知ることから日本人の強みをいかに強化育成システムを構築することが何よりも重要である。

参考文献

- ATP web site 2003
<http://www.atpworldtour.com/Rankings/Singles.aspx>
 国際テニス連盟web site
<http://www.itftennis.com/abouttheitf/>
 ヨーロッパ読本「スペイン」碓順治 [編]
 (2008) p.22
 TeniSpain web site 2003
<http://www.tenispain.com/clubes/>
 WTA web site 2003
<http://www.sonyericssonwtatour.com/page/>